

教会暦による説教  
マルコによる福音書 16章7節  
『告げられる主の復活』

主イエスが逮捕されてからの弟子たちはどうしていたのでしょうか。「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」という記述がマタイ、マルコの両福音書にはあります。主イエスを裏切ったユダはもちろん、他の11人の弟子たちも皆、逃げてしまったのです。しかしそれにしても、彼らは主イエスから直接「わたしは苦しみを受けて死に、三日後に甦る」といわれたのを聞いていたはずです。もし彼らはその言葉を信じていたならば、当然墓に行ってみるとか、あるいはどこかで主がおいでになるのを待機するとかしていてもおかしくはないのです。しかし彼らのうちの誰一人として、そうはしなかった。どうしていたのでしょうか。放心状態だったのでしょうか。自分たちも逮捕されると思って怖くて閉じこもっていたのでしょうか。裏切って、逃げた、という事実は彼らのうちに重くのしかかって来ていたでしょう。

11弟子の誰一人として、墓の様子すら見に行っていない。墓に行ったのは女性たちでした。すると墓の中には、主イエスのからだではなく、白い長い着物を着た若者が、主イエスが復活されたことを告げたのです。

若者は女性たちにこう語ります。「あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに伝えなさい。『あの方はあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われた通り、そこでお目にかかれる』と。」新共同訳聖書には訳されていないのですが、ペトロに伝えなさい、というところ、「ペトロにも」と原文にはあります。ペトロに、ではなく、ペトロにも。他の翻訳を見ても、「特にペトロに」と訳しているもの、「とりわけペトロに」と訳しているものがありました。

ペトロは、弟子の中の代表格でした。普通に考えれば、ここは、「ペトロを始め弟子たちに」、主の復活を告げ知らせなさい、といってもいいところを、弟子たちと、ペトロにも、といっているのは立ち止まる必要があります。若者は主の言葉を告げたのです。つまり復活された主イエスがあえて「ペトロにも」といわれたことに他なりません。なぜペトロにも、と言われたのでしょうか。

ペトロは三日間、主が十字架にかかる直前、大祭司の庭で、三度主イエスを知らない、といって否認したのです。「たとえみんなが躓いても、わたしは躓きません」といって大見得を切ったにもかかわらず、主イエスを知らないと言

ったペトロ。そもそも主が十字架へ向かう中で、ゲツセマネで祈られる時、主イエスはペトロをわざわざ伴い、その祈りの場に立ち会わせたにもかかわらず、眠り込んでしまったペトロ。主イエスが苦しんで神に祈り続けておられたときに、眠っていたペトロ。キリストが十字架の予告をされたとき、それを諷めたペトロに対して主は「サタンよ退け」といわれた。

ペトロはこれまでのことを思うと本当にやりきれない自分を痛感していたのではないか。ペトロの歩みは失敗の連続だと捉える人もいるかもしれない。だが、失敗といえば聞こえはいいが、正確にはペトロの本性がその都度出ていたと言った方がいい。それは残酷なまでに残念な姿。期待を裏切り、人としても醜い。信仰という点ではないも同然。それが地だということです。このペトロに対して、主イエスは「ペトロにも」告げ知らせなさい、と言われたのです。これを聞いたペトロはどう思ったのか。「ペトロにも」という主の思いは彼にもまちがいなく伝わったのではないか。自分は見限られてもしょうがない人間。もうお前は弟子でも何でもなし、そう言われてもうなずくしかない人間。土壇場で裏切るような人間とは今後二度とつきあいたくない、そう言われても何も言い返せない、そういう自分。その自分にも、なのです。

弟子たちと、ペトロにも、わたしの復活を告げ知らせなさい。

ペトロにも、という一言の中には、ペトロを見棄てない、見限らない。見棄てないどころか、裏切ったペトロにも、まさにそのペトロに、わたしの復活を告げ知らせるのだ、というキリストの意志がある。ペトロはこの告げ知らせを聞き、どれほどの喜びに包まれたか。どれほどのありがたさに包まれたことか。

自分はキリストから見棄てられていない、という言いつくしがたい感謝にペトロは包まれたのではないか。たとえ自分がどんなにつまらない人間であったとしても、キリストはこの自分に復活の主として呼びかけてくださる。見棄てられない。

ペトロが復活の主と出会う、それはペトロが失意の中にも主の墓に行き、そこで甦りの主と出会った、ということではなかった。ペトロは何もしていない。主ご自身が、主の方から、我々に近づき、語りかけ、呼びかけてくださる、復活の主イエス・キリストと出会うということは、そういうことなのだ、とこの出来事は語っています。パウロも全く同じでした。彼が回心ということを経験していくのは、彼の中の内面の変化とか、精神的な変遷、というようなことでは全くなく、主の方から近づいて、呼びかけてくださる、その声を聞いた、そこでパウロの回心は起こっていったのです。

ペトロもここで、この自分に告げ知らされる声に聞くのです。

復活は、単なる奇跡なのではない。よく教会の中でも復活がわからないとか、復活を信じることができるとか、まるで復活という一つの奇跡を自分の中でどう消化できるか、といったように取り扱うことがあります。死んだ人がよみがえった、そんなことがあるの無いのか、というぐあいに復活だけ切り離して考えるのです。しかし聖書はそのようには復活について語ってはいない。

弟子たちは主の復活について予告されていましたが、しかし、最初に言ったように、復活の朝、墓に来たものは誰もいませんでした。女の人たちも復活を信じて墓に行ったのではなく、死体に香料を塗ろうと思ってきたのです。誰も主の復活の事などまともに考えていない。まともに考えられないからです。人間の持てるものでは。実際、聖書には復活がどのようにして起こったのか、何の記述もない。どこで、どういう仕方で復活が起こったのか、何も書いてないのです。関心がない、といってもいい。復活を信じることが、一つの奇跡的な事象を受け入れるか受け入れないか、というようなことではないからです。ペトロ自身、この若者の告げ知らせを聞き、いつどこで、どうやって復活を信じるものとなったのか、聖書には何の記録も記載もないのです。

復活は、奇跡としてだけ信じる信じない、というようなものではない。この出来事は神がイエス・キリストを死人の中から甦らせた、という出来事です。復活は神が自分の力の強大さを示すためになさったのではなく、それによってイエス・キリストの救いを完成し、人間を救うためになさった業です。復活の主と出会い、人間が救われるためにこそ、神はキリストを甦らせ給うた。

ペトロはやりきれない自分を抱え込んでいた、残酷なまでに残念な自分がいつもあらわになってきた。人間として醜い。信仰という点ではないに等しい。その自分が復活の主によって呼びかけられているのです。あなたのためにも復活したと告げ知らされるのです。ペトロは死者に等しい状態から甦らされるのです。そういう呼びかけなのです。自分という人間の消したいと思うような姿、なかったことにしたい自分、罪の自分ということなのですが、そこに届く呼びかけなのです。

復活信仰ということは、死んでいる人間がよみがえるということです。イエス・キリストの神による死人の中からのよみがえりという出来事が、わたしという人間の死者と等しい状態からのよみがえりにつながっていくものなのです。それが起こっていくのが復活信仰なのです。

ペトロも、パウロもキリストに出会う前は死者と等しい状態だったのです。もちろん本人はそうは思っていなかった。しかしペトロの地の姿も、消したい

ような姿も、信仰のない姿も、すべて知っておられる主イエスが、ペトロのためにも、十字架にかかり、死んで、復活された。その主がペトロにも呼びかけてくださる。あなたのいのちはわたしの復活の中にある、ということです。

復活を信じるとはそういうことです。ペトロも、パウロも、弟子たちも、復活の主の呼びかけを聞くのです。そして、復活していくのです。ペトロも新しい人になっていくのです。消したい自分、なかったものにしたい自分も、復活のいのちの中であって生きれるのです。ペトロは新しい生涯を歩み始めます。それは復活の証人として歩む、という生涯です。というか、彼に証言できることは、ただ一つしかないのです。自分はイエス・キリストの復活の中であって生き活かされている、ということです。教会が伝道を始めたとき、何をこの世界に向かって語り始めたか、たとえば、イエス・キリストは十字架にかかり死んで、復活された、ということだということを我々は使徒言行録から知らされてきました。それだけ、そのことをくりかえしくりかえし宣言のように語り続けていくのです。

呼びかける声は、わたしたちに一人一人にも与えられています。ペトロにも語られたその声がわたしにも与えられているのです。その声に聞いて、わたしたちもキリストの復活の証人としての生涯を歩んでいきましょう。